

浄土

八月号

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授受郵便物）認可
昭和三十九年七月二十五日 印刷 昭和三十九年八月



・六呂見のお盆

・科学と念仏

法然上人鑽仰会

表紙の解説

初めての説法

サールナート 五世紀

サールナート（鹿野苑）は、仏陀が五人の比丘に最初の説法をなされた土地です。今は美しく整えられた庭に、花が咲きみだれ、僧院の跡や幾何学的な模様を残すタメークの大塔、野生司画伯の仏伝の壁画のある初転法輪寺などが点在しています。ここにあげた仏像は、僧院跡の一つから発見されたもので、砂岩を用い、説法の印を結ぶ仏陀を中心とし、下部には法輪を中央に五人の比丘、一人の信者とその子供らしきものを左右に配しています。背面には整った花模様の上辺に天人、下辺に獅子がいずれも動的な姿を見せ、全体としてまとまった形をなしています。

五世紀の北インドは、強力なグプタ王朝の支配のもとに、仏教芸術を中心とするグプタ様式が栄えた時代です。彫刻の分野でも、バルフート、マトウラと発達して来た一連の形式が発達の頂点に達し、マトウラに見られる優雅な仏陀の立像を始め、サールナートに現存する等身大の菩薩像など、マウルヤ王朝の磨かれた大理石のはだとは異なったなめらかさと、大きなスケールをほこっています。

（佐藤良純）

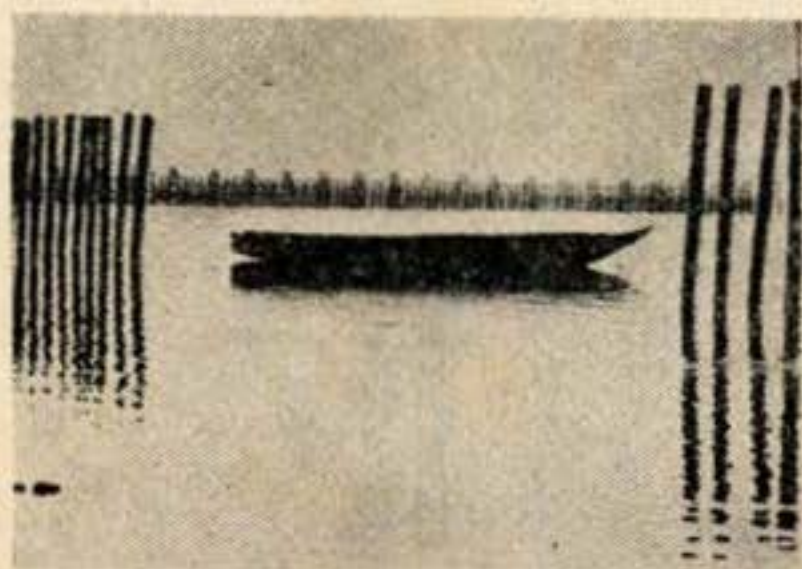
香りたかき浄土トラクト 一既刊一

選択集私解	大正大学教授 竹中 信常著	新書版 120P	価 120円 30円
真理のはなたば	大正大学教授 佐藤 良智著	新書版	価 70円 20円
一枚起請文をめぐる	村瀬 秀雄著	新書版 120P	価 120円 30円
信仰への導き	文 博 佐藤 賢順著	B 6判 16P	価 15円 10円
①月影抄 ②葵ぐさ	村瀬 秀雄著	B 6版 16P 各冊	価 15円 10円
浄土宗のおしえ	大正教授 宮林 昭彦著	新書版 20P	価 25円 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に
 眞実の信仰をもとめている檀信徒の方々に
 （多数申込みには）
 割引いたします

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (262) 5944
 振替 東京 82187



わが心のわろければ往生はかなは
じと申あひたるが、やがて本願をう
たがふにて侍るなり。

(往生大要抄)

— 目 次 —

表 紙

初転法輪像

随 想	曹原信海・大沢あきこ・宮林昭彦…(2)
科学と念仏	七 条 晃 正…(4)
続まろい石	合 田 微 雪…(8)
不殺生のいましめ	野 田 秀 雄…(12)
六呂見の記主念仏	伊 藤 唯 真…(25)

近 世 文 名 録 杉浦演順僧正	高 橋 良 和…(16)
東南アジア旅行記	佐 藤 行 信…(18)
茶の湯に 生きて人々 灰屋紹益	林 左 馬 衛…(22)

紹 介 岸覚勇著「浄土宗義の研究」第一輯	(15)
ご法語をいただく	(32)
表紙の解説	(11)
編集後記	(33)

続三部経の再発見	須 藤 隆 仙…(28)
----------------	--------------

慈覚大師と法然上人

菅原信海

(早稲田大学講師)

法然上人が、「まさしく臨終にのぞみ給とき、慈覚大師の九条の袈裟をかけ……ねぶるがごとくして息たへたまひぬ。」(勅伝三八)とは有名な話であるが、これより前、上人は、承安五年(一一七五)に高倉帝に円戒を授けて、円戒相承の上からは慈覚大師の「九代の嫡嗣」(同一〇)であるといっている。他方、慈覚大師が、唐より伝えた法華懺法・例時作法の行儀は、わが念仏門の興隆を促すこととなり、同じく大師将来のいわゆる引声念仏は、天台声明の源流をなし、のちの浄土宗のかの十夜法要の念仏となったことは、これまた有名なことで、正に鎌倉期における浄土教の発展は、大師にこそその因縁があるといえよう。

一つの思い

大沢燁子

(アメリカ大使館勤務)

ふとした縁で米国の若き学者バックカード氏を識りその評論を読む機会を得た。氏はその「日本の新しい国家主義」と題する論文の中で、「日本は今も尚、世界というものの中に適切な地位を希求する階級意識的国民である。彼等の間には、日本は国際政治の場にも最高位たるべき当然の運命を持っているのだという語られざる協約がある」と述べて、過去の敗北を屈辱とし、之にかえるに最高榮譽を以てしようとする日本人の姿を、或はカメラ日本、トランジスター日本、柔道日本、果てはオリンピック、学生運動の中にまた捕えて細く論評している。ここまで指摘されてやっと成程とうなずいた私はやがてある友人の言葉を思出した。即

お牛様

宮林昭彦

(大正大学助教授)

牛にひかれて善光寺まいり、といわれるように、信州善光寺は牛とは因縁浅からぬものがある。いまも白牛が善光寺金堂の裏手にのんびりとくらししている。但し、この牛は、日本産ではなく、はるか海を越えてインドよりおこしになった。いわゆるお牛様である。

このお牛様も、故郷のインドでは「聖牛」としてはなかなか優遇されている。人や車やビルに入り混じって牛の姿がみえ、中には横断歩道を自動車をとめて、ゆったりと渡っている写真を見たことがある。近代社会において、この様に牛と人とが入り混じって暮していることに、いささか奇妙な感じをうけているが、最近になって、興味あるはなしを聞いた。それはインドの一人あたりのミルクの摂

これ等の一一については、実は問題が多くひそんでいる。最近発行の福井康順博士編「慈覚大師研究」(天台学会刊)による時、山口光円氏の「慈覚大師の浄土教と円戒について」・井川定慶博士の「慈覚大師流円戒と浄土宗の相承」・石田充之博士の「慈覚大師と日本の浄土教」・大橋俊雄氏の「慈覚大師と法然上人——円頓戒の相承と不断念仏を中心として」・小笠原宣秀博士の「山西蒲州仏教と慈覚大師」等の諸論は、即ち特にそれであって、慈覚大師と法然上人との研究において、現下日本の学界を代表しているものである、といえよう。本書は、慈覚大師が、貞観六年(八六四)に示寂されてから、数えてちようど一千一百年に当る昨三十八年、その祥忌を記念して企画された論文集である。ここに収められた研究は、天台宗内外の斯界学人から寄せられた、実に四十四に及ぶ雄篇であって、その慈覚大師についての諸研究は、広く日本及びシナに亘っての、宗教・文学・歴史・美術・音楽等々のあらゆる分野にまでも及んでいる。

ち「今の政治家達は彼等のしよとする事が将来の日本に是であるか否である等、考えてはいない。兎に角、かつて彼等の時代に良かった事をそのまま遺したい丈なんだ。それを彼等の目で確かめておきたいんだ」と。これはある意味でバックカード氏の言を裏書するものである。

然しそれはともかくとしても、古き人達にはとにかく文明開化の世、大きく世界へ眼をむける余猶があつた。また戦後派と言われたとしても現代の若者達は新しい自由世界の恩恵を生れ乍らに享受しているのである。

それに引換え物心ついた時には既に戦争に明け暮れし世界のつんば機敷に置き放しにされていた私達は、時代がそうさせたとはいえ考えれば考える程耐えがたい思いである。しかも時代は最早や私達の一人立を要求している。果してこんな大人達が、カメラ日本、トランジスター日本を誇っているのだろうか、それより、今までの無知と不勉強とを、世界の一隅でもとり戻したい気持である。

取量が四〇・四キロで、日本のミルク一人あたりの摂取量一二・五キロのなんと三倍をこえる、ということである。専門的なことは分らないがとにかく、インド人があの熱い自然的な条件のなかで、腐敗しやすいミルクを、日本人の三倍以上も飲むことの出来る秘密は、案外人より優先しているお牛様のおかげではなからうか。

そもそもインドに牛の多い理由は宗教によるのである。インドの代表的な宗教の中で、ヒンズー教もイスラム教も牛や豚の屠殺を禁じ、その食用を厳禁している。牛を殺すことはヒンズー教徒にとっては、マヌ法典に定めらるるように極悪の罪であつた。

いまでこそ、人は、マヌ法典やコーランの教典が、牛や豚の屠殺や食用を禁じていることをいぶかしく思うかも知れない。しかし、いま、牛乳を飲みながら、近代社会の食生活を考へてみると、東洋古代の宗教的エイチが、いまにいたって、幸いをもたらししていると考へるのはあながちちがひすぎであらうか。

科学 と 念 仏



七 条 晃 正

(医学博士・文学士・大僧都)

(一)

「科学と念仏」という題で感想を書くようにという竹中信常博士の申しつけでありますから、三千字ばかり所感を述べさせて頂きます。私は真宗大谷派の寺に嗣子として生れたので、四・五才の頃から衣を着せられて御仏飯で育てられました。幼少父母に死別したので姉夫妻に育てられ、大谷大学に入学し、予科三年のときに病氣になり、長い療養生活のうちに、姉夫妻の愛育の恩に思い至り、住職である義兄のあとはその実子に嗣いで貰うこととして外へ出て医師になりました。寺がきらいで外へ出たわけではありませんから、姉夫妻を初め、大谷大学の教授方の心からのお育てにあずかって、時あたかも法然上人の七百五十回忌、親鸞さまの七百回忌に遭遇したのを好機として仏教大学に入学し、専ら仏教学を選択履習して、卒業論文は「選択集に於ける選択行の解明」を書きました。「親鸞は弟子一人も持たず候」と言われた真宗の家風として、師弟関係は余り廓然としないことになっていますが、それでも、おのずから師と仰ぐ方は決って来るもので、私は正親含英先生に私淑して居ります。このような生い立ちでありますから、私には特別な求道の動機とか回心とか言うものはありません。私の思想とか信仰とかを理解して頂くには、この点をのみ込んで頂かないと判り難くなるので、

最初にあからさまに五十五年の生涯を申述べたのであります。

(二)

私は科学と宗教とを氷炭相容れない性質のものと思って居りません。例えば、医学医療というものは薬師如来の本願が、現世的な表現を取って働いているものであります。金子大栄先生によれば、すべての宗教は薬師信仰と観音信仰と弥陀信仰との三つの類型に分けられると言うことであります。病苦からのがれたいと言う人間の願望に依じて、病苦からのがれさせたいと言う如来の願望を感受して、これを信知するものが薬師信仰であり、幸福を得たいと言う人間の願望に依じて、幸福を得させたいと言う如来の願望を感受して、これを信知するものが観音信仰であると思います。これらの人間の願望と如来の慈悲とが触発するところに科学の萌芽が発生するものであらうと思います。しかしながら、人間の願望と如来の慈悲とが相接触すると言うだけでは、具体的な方法は現れて来ません。具体的な方法が現れるためには人間の知的努力が必要であります。人間の願望を出発点とし、如来の慈悲を増上縁（推進力）として人間の知的努力が行ぜられた成果が科学の発達歴史となったものと思われま

す。科学は知的な立場で観察し、知的な立場で判断し、知的な立場で処理しつつ発達する建前を取るものでありますから、一見すると科学は人間の情意を無視し、否定するもののように思われます。たしかに科学は方法論としては人間の情意と切り離されたものであります。しかしながら、その発生の源基は人間の願望であり、その発展の目標は如来の本願の成就であると考えられます。医学を初めとして人間の不幸を取除こうとする科学は薬師如来の大悲を成就せんとするものであり、工学を初め、人間に幸福をもたらさんとする科学は観音菩薩の本願を成就せんとするものであります。この様に考えないと、科学の発生と発達とその未来像とを理解することが出来ません。したがって私には科学と宗教とが矛盾関係におかれる如く言われている世間一般の考方に同ずることはできません。

(三)

このように、人生における不幸を除こうとする願望と努力を知的な立場で観れば科学であり、情意的な立場で観れば薬師信仰に包括される宗教であると言うことが出来、人生における幸福をもたらそうとする願望と努力を知的な立場で観れば科学であり、情意的な立場で観れば観音信仰に包括される

宗教であると言うことが出来るのでありますが、これらはいずれも人生における問題を扱うものであります。しかるに、人知が次第に発達し進歩して参りますと、人生における不幸と幸福とを問題にする段階から、さらに一步つっこんで、人生そのものが問題となってくるのは自然のいきおいであります。この人生そのものを知的な立場で問題にするものが弥陀信仰であります。人類の精神活動の歴史を振り返ってみると、初めに人生における不幸な問題をのがれたいと言う願望が生れ、また人生における幸福に近づきたいと言う願望が生れ、これが原始的な宗教となるのでありますが、そこからやがて科学の萌芽が芽生え、科学の発達とその応用によって、不幸を排除く多くの業績があげられ、また便利と快適とをもたらす多くの業績があげられ、かくて文化のすすんだ社会が築きあげられて来たことはまぎれもない事実であります。しかしながら、それにもかかわらず、人間は本当にしあわせになつたではありませんようか。個々の人間の歴史においても同じことが言えるのであって、不幸を克服し、富貴を招来したにもかかわらず、本当のしあわせを感じることが出来ないのは何故でありましょうか。ここに人生における諸問題に眼を奪われていた段階から更に一步前進して人生そのものが問題となってくるのであります。ここまで人類の精神活動の歴史が進ん

で来ているにもかかわらず、人生そのものを問題にするところまで来ていない個人があるとするならば、その個人の精神活動の歴史としてはまだ発達の途中にあつて、人類の歴史には追いついていない訳であります。

人類の歴史として、人生そのものを問題とした最初の人は釈尊でありましょう。ここに釈尊が人類の歴史上唯一人の仏陀と仰がれる所以があるのでありますが、真に切実にこの人生そのものを問題として、これと取っ組んだ人は法然上人でありましょう。法然上人が浄土宗を寓宗的地位から独立して浄土宗を建てられた所以は、純粹に人生そのものを問題とすることこそ人間最高の課題であることを判然としたかったからでありましょう。換言すれば、原始宗教、個別科学と純宗教、純哲学とを判然と區別したかったからでありましょう。そして更に、人生そのものを実践的に問題とするものは哲学ではなくて純宗教であることを判然としたかったからでありましょう。有名な「聖道門の修行は智慧を極めて生死を離れ浄土門の修行は愚痴に還つて浄土に生る」というおことばを「哲学の修行は智慧を極めて生死を離れ、宗教の修行は愚痴に還つて浄土に生る」と書きかえてみると、法然上人の言わんとせられたことが、おぼろげながら感取されるのであります。

「科学」と「念仏」とを結びつけて問題とすることは多くの人に取って極めて興味ある課題であり、私にそれを課せられた意図もよく判るのでありますが、以上述べ来った様に、科学と念仏とは次元の異なる問題であります。併しながら、敢てこれを結びつけて言うならば、念仏は人間の根本的な自覚であり、人類の最高の課題であります。実践的に言うならば人間の、従って人類の根源的な生き方在り方であります。科学は人間の、従って人類の根源的な生き方、在り方に奉仕をすべき精神活動であります。法然上人は「この世の過ぐべきようは念仏の申されんように過ぐべし」と言われましたが、科学は「念仏の申されんように過ぐべき」この世の奉仕者であります。科学は念仏に指導されてこの世に奉仕すべき重い任務を持つものであります。かくてこそ科学は人類の尊い財宝となるものと思われるのであります。

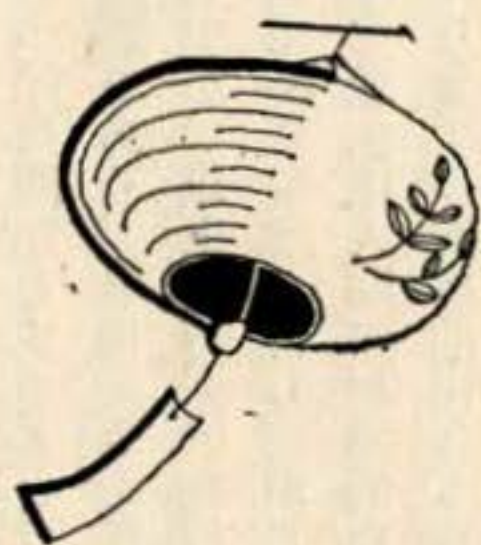
オリンピックものしり帖

「オリンピックの選手村の食事について、お話ししよう」選手が喰べる主な食物は、牛肉、豚肉、マトン肉、にわとり、小牛等です。

普通の人是一日カロリーを二、〇〇〇〜二、五〇〇カロリーとりますが、選手達は一日大体六、〇〇〇カロリーとります。普通の人が四〇グラム位の肉を喰べるとき、選手たちは、一人二〇〇グラムから二二〇グラムの肉を喰べます。ですから豚一匹五〇キログラムとすると、それからとれる肉は二〇〇人分です。野菜は一日一人一キロ喰べます。にわとりの肉は一羽八〇〇グラム位のを一羽半喰べます。選手達の食事を作る人はコック長四人と、コックさん三〇六人の計三一〇です。コック長は三〇年から四十年の経験のある人達で各国の料理の出来る人で、他のコックさん達も何れも選ばれた立派な腕の方達です。選手村には七、二〇〇人の選手の人があります。コックさん達は七、二〇〇人分の食事を、朝、昼、晩、と一日三回、二一、六〇〇食分も作ります。其の食事の費用は一日六ドルで、日本のお金にして大体二、一六〇円です。

各国によって、各々喰べ物が幾らか違います。イギリス人はむしやき、アメリカ人はフライ・チキン、ハンバーグ等と栄養本位でいきます。東南アジア、インドネシア、パキスタン、ネパール、等豚肉を喰べない回教徒には特に、気をつかいます。

石　い　ろ　ま　続



雪　微　田　合

○ この程軸物用の戸棚を整理していたら、筆太の「四海兄弟」仮表装物が出てきた。昭和十八年新春とあるから、戦争酣の頃の書である。物資欠乏も甚しい正月の某日、前触れもなく拙宅に現れ「撃ちてしまむ」から「鬼畜米英」まで用意してきた一書道家に、この四文字を所望した時の、彼の阿然たる顔を思出した。

終戦後になって「実は私も貴方と同意見でした」という訪問客は意外にも多いけれど。

○ アロエという美しい植物は、暗い室内で水やりを怠っても元気に育ち且薬用にもなるという。其処で私はその鉢を沢山育て、かりそめの縁の病院患者でも何かと縁をつくって慰問し、プレゼントする事になっている。「どうぞアロエの様に元気で病氣と闘って下さい」と。

植木鉢を病氣見舞に持参すると「根（寝）つく」といい縁起が悪いという向きもあるが、「紅葉は秋（飽）が来る」といいながら、世に紅葉柄の衣装の何と多いこと。迷信は不可ない。

○

桐簞笥からタトウ入りの自分のや夫人の殆ど手通さずの衣類を次々に取出し「どうぞお持ち下さい」と。何がしを彼に融通はしたものの業者ではあるまいし、思いもそめぬ事。折から五月空。端午人形の飾られた床間を振返り「お子もあるのですね。其為にも頑張つて下さい」と激励して其家を辞したが。

それから三年後、突然拙宅に彼が現れ、用立てた金額と名物菓子折とを差出した其腫も実に明るい。「お目出度う。が、これはまた次の資金にでも当てて下さい」と辞退したが聴入ればこそ。然し、彼は其時すでに某新興宗教の信者になっていた。信仰以外のものがチラつく。

それにしても、私の好きな古来宗教の道にたずさわっている方々の掉頭一步の積極性が望ましい。前記病院患者のみならず葬儀のあった家の遺族からして、救いの手に餓えている。読経供養以上に重要な仕事が控えているはずだ。

○

神社仏閣参拝名儀で以て、汽車で五駅距てた拙宅まで、総受持生徒を連れて学究遠足した某若い先生は、同校全職員のある某有名温泉地内学校視察旅行に、居残りを宣言した。「で、

何処の学校見学でしようか？」と尋ね「野暮をいうな」と一笑に付されたからだ。

「其様な生真面な事で此世知辛い世渡りが出来るか」という向きに申し度い。例えば最も掛引きの必要を説く実業界にあってさえ、この卒直さを推進してこそ、新道は開かれるものであると。

今流行の、お寺方の各種アルバイトも結構だが、御開山の本命をも忘れずに願ひ度い。

○

娘のお供をした銀座の某しる屋のお椀は処々欠け、漆もはげていたが、高野山宿坊でご馳走になった汁椀は見事で極上の漆器かと思ったら、プラスチックか何かであった。新製品であろうと何であろうと、いい物の方がいい。

拙宅では数年以前から冬のお吸物にもガラス器を使用してゐる。意外見た目も温かそうで、あまり熱い飲物はガンにかかり易いとの新学説もある。天皇はその気づかい無しと某ユ一モア人もいつていた。岩田ガラスの灰皿を凝と見ていたら、抹茶々碗に見えてきた。若い千宗興氏は外国から色々な器を持帰り茶道に利用されている。不当と思われる程高価な古名茶器は、モト朝鮮民家で日常使用の食器であったとい

う。

新時代の宗教に就ても、考えを新にすべき点もある様だ。うっかり受売り説教で済まそうものなら、迷信だと笑われる危険性もはらむ。

○

愛犬が逝ってしまったので、夏場犬小屋を涼しい蔭にくれていた枇杷の樹だけど、除いた。そして其下で永年恵まれぬ存在であったクコの木を、今後育成したいからである。クコの葉も葉だと、喜ばれる向きにアロエ同様、人様に進呈したい。

大空詩人に習って愛の行脚を続けている小川安夫青年が、何度目だったか拙宅来訪時にも「クコを上げましょう」と差出し、見るからにあぶなげな私の健康を案じて下さる真心が嬉しかった。

身体障害者の彼は、此ほど東京で温かく差延べられた人々の援助で、色紙展を開催するという。本当に不幸な人々を代表して、しっかりやって欲しい。私も兄も大学時代、手と足を負傷している。

○

某末亡人は病院の付添婦をしながら、令息達と殆ど別居生活が続けているが、嫁との仲も実の母娘以上にむつまじい。サラリーマンである令息は目下労働組合の幹部だが、いづれ重役の列に連るだろう。早く逝かれた夫君は芸術家であったが、別にゆるぎない職業も持ち、前篇（六月号参照）紹介の教会宣教師の如く、一見何をしている人物か、当てる者がいなかった。人間の中味の繊細な証拠である。また好きな酒も極く少量の晩酌以外は慎んでいた。だから長い病院生活が続いても屈託しなかった。裕福とはいえぬまでも遺児もアルバイトなどせずにそれぞれ大学も卒えている。お孫さんも無邪気だけれど、徒に甘やかされてばかりではない。子供はいづれ大人になるのだ。切手のコレクションマニアには育てぬ積りという。

権利と義務とのバランスのしっかりとした一家というべきであろう。面白いことに嫁は仏壇に燈を上げ、姑のネックレスには十字架がぶら下っていて、しかも不思議と互に話合う。

私は思う。どうせ世には本当に不幸な人と、態々不幸な仲間座にありつこうとしている手合とがある様だ。

○

私事で恐縮ながら、実は今春四月廿六日に一人娘の結納、翌廿七日に妻入院乳ガン手術。然し妻は娘の事で一安心し、己の苦痛は全然訴えず、其後一ヶ月おいて始めたコバルト治療がこたえてか六月十七日から毎日輸血を続けている。然し「どうぞ自分の血を」との清らかな方々の供血希望続出に、感激の明暮を迎えている。時には押掛け供血者の鉢合せも生じカイヨウを秘し、そっと私の血を与えたところ「あなたは受ける側ですよ」と叱られた。何という幸福者であろう。しかもそれ等の方々の中には、思想の右もあれば左もあり、職業にしても色々。つまりやはり、深い愛情を以て臨めば、大抵の事は解決するのではないかと、一入思う昨今である。重病人を健かに立直らせたり、満足して永眠させんが為の浄話も、献身捨身の介抱の裏付あってこそ、効果も倍加する。

のを。

然し私は今、妻が生死の境にあるというのに、絶えず笑っている。数年以前母が死んだ時もそうだった。通夜の晩よく眠れといわれ、久し振りに床をとりグツスリ熟睡したが、人様から熱いみ心の悔みをいわれる度、嬉し涙をハンカチで拭う術を知らず（「不如帰の浪子」みたいだと照れ）為に爛れた顔を繙常で包み、葬儀に出席した。だから「微笑をたたえた仏像」もあっていいのではないだろうか。若い世代も希んでいる。「微笑む母」それが新しい母であるともいえよう。「あらゆる表情のうちで、笑微みは最高のものである」といった詩人もある。

○

ルブル美術館の、貴婦人を描いたダウインチの「モナリザの微笑」より、純朴な農娘を描いたコロの「真珠の女」の方をとる専門家も多い。微笑をたたえているという仏像は無い。他国にはあるが、日本の仏の気品に及ばぬ。女優は微笑まずして愛を訴う。母はその子を見る時微笑をたたえない。少年院の職員は微笑め。養護施設の夫人は微笑以上のもの。

○

.....

.....

.....

不殺生のいましめ

話の囊の水漉

雄 秀 田 野

(東京・芝学園教諭)

ここにかけた「コーヒー漉し」に似たものは「漉水囊」と呼ばれる、一種の「水漉し」である。これは元禄十一（一六九八）年に出版され、当時の浄土宗法要集として知られる「諸廻向宝鑑（第二巻）」にでていゝるものである。この説明によると漉水囊は、いわゆる六物（二十五条・七条・五条・鉢・坐具・漉水囊）の一つで、その昔、出家が日常携帯すべきものの一つであった。

袈裟類や鉢・坐具などの法具はともかく、この漉水囊は今日殆んど見かけない。宝鑑の第二巻に記されているところを見ると、元禄時代には一応形式的でも出家の所持品とされていたのであろう。ではこれが何の目的に使用され、如何にして用いられたのであろうか。

唐の西明寺道世の労作「法苑珠林」の第七十五「放生篇」には次のような例があげられている。



一、一切の道俗七衆らに、水を漉して飲用せしめ、水中の虫をもとの水溜りに帰らせることを説いている。もし水を得た所が遠方ならば、近くの池や井戸をみつ、七日間水を保つ可能性がある時、そこに放してやるようにする。もし水中の虫を見付けた場合、人に器繩を貸すことを禁じている。

（僧祇律）

二、二人の比丘が世尊にまみえんとして遠路はるばる舎衛に向った。道中渴飲にあい、そこには虫が寄生する水のみが得られた。生死の境を眼前にして遂に破戒者は水を飲んで生き、持戒者は水を飲まずに他界した。その後、持戒者は三十三天に生じ、仏にまみえて足を礼し、三帰を受けて天上に帰った。破戒者は痴人と云われた。

又ある所に、征討に向わんとする兵士がいた。彼らは此丘に教化され、皆、弓先に漉水囊を持ち、これで水を漉して

飲んだ。この有様を役人がみて早速国王に奏言した。王は怒って皆を殺そうとし、兵士たちに向って「汝ら小虫すら殺せないで賊を殺せるか」と云った。すると兵士らは王に向い、「我々はこの小虫どもが国に害を及ぼすならば殺したでしようが、今は虫に怨みはありません。だからこそ瀧して飲むのです。」と答えた。

王は彼らを許し、この兵士らの義慈善根の力は、ついに賊をして皆投化せしむるに至ったのである。(十誦律)

三、水溜りの水を詳細に観察すると、細虫がいる。これを瀧して飲む者は殺生戒を保持している、と説く。(正法念經)

四、瀧袋(瀧水囊)がなければ、僧伽梨(袈裟の一種、大衣)の角で水を瀧さねばならない。(四分律)

五、住居を建てようとする時、最初に水中に虫がいるかどうか確かめ、もし虫があれば別の井戸を掘ること。(薩婆多)

これらはすべて經典に記されているものだが、さらにこれらを裏付けするが如き文献がある。唐の義浄三藏(六三五―七一三)によ

り著わされた「護命放生儀軌法一卷」がそれである。義浄は七世紀中頃、かの法顕・玄奘の業績を慕って生命の危険をもちえりみず、はるばるインドに赴いた名僧である。中村元博士は、その目的は戒律に関する規定を明確にせんがためであつた、と述べられている。この儀軌法の内容は次の如くである。

最初に、生を愛し、情あるものの生命救護は仏教の本懷であり、そして瀧水は比丘の要儀たることを説いている。続いて放生器の製法および使用法を説明している。最後に殺生は仏教で最も禁じているのに、中国においては瀧水に心掛けるものが少ないので、この儀軌を説くとしている。

慈悲の精神が人命に対してばかりでなく、水中の小虫にまで及ぶと説くに至っては、放生の徹底した表現である。この放生器はいわば銅あるいは鉄などで作った罐のことで、瀧水の時、これで虫を取り、更に井戸や河川に放つのである。現在行われている放生会のおこりがここにあるのである。

今日八幡宮などで催されている放生会という儀式は、この放生器使用の放生慈行ではな

い。しかし放生の本意を有しているというのと自体は変容していない。

この放生慈行と表裏の関係にあるのは、数ある戒のうち、最初にあげられる「殺生戒」である。殺生戒は当初人命を対象としたが、後に生物を殺さないと同時に一切の生物に慈愛をもって接するようになった。慈悲は仏教の根本思想である。慈悲から離れては仏教は考えられない。すなわち不殺生の人は慈愛心をもっている人と云える。この不殺生を一步進めて積極的な行為をするのが、すなわち放生である。放生も殺生戒も慈悲心もすべて根本は「生」に帰するものである。「生」はこの世の生きとし生けるものの、尊い真実の姿である。殺生は止悪の業で、己を戒めるもの、放生は作善の業で、人あるいはすべての生あるものに施す行為である。ここに大乘仏教でいう「上求菩提。下化衆生」の意義があり、「自利利他」の精神がいかされるのである。

さて今日の日本の姿をここであらためて見つけてみよう。政治・経済などの大きな問題はさておき、殺人犯罪や交通事故ではどう

か。現代人の多くは昔の出家が飲料水の中にいる虫を殺さず、濾水して飲み、その虫をそつと水に戸して生かした、などという話を聞けば腹をかかえて笑うだろうし、それらを記した経典などには見向きもしないだろう。あまりにも現代の社会状況が混沌としており、人命に対する正しい判断を下すには麻痺しているようである。原子力時代の現在から、遠く瀧水壺を使用して飲み水にあてていた昔を振返ってみれば、人類の歴史は長足の進歩を遂げている。このような事態にあってこそ「急がば廻れ」の諺にもあるように、昔の生命尊重の時代を振返り、あらためて生を受けた喜びを認識し、小虫をもいたわる気持をもちたいものである。

ほほえみ

ほほえみは、万物の靈長たる人間のみがもつ独特の自己表現法である。この貴い天のたまものを正しく利用することは、人間のもっている一大特権である。ほほえみは仕事をゆかいにし、交際をはがらかにし、家庭を明るくしそして寿命をながくする。 デール・カーネギー

◇教界ニュース◇

▽夏山や一足づつに海見える一茶、奥信濃に育った一茶の目には、海の蒼さが深く美しく映ったことであろう。人は、大自然の風物のうつりかわる中に、人生に潤いを感ずる場合が多い。また自然よりうける恩恵はかぎりない。しかし、その自然が猛威をふるい出すと、どうする事もできない。新潟地震とい、その後相ついでおこる豪雨による災害等をみても、あらためて天災の恐ろしさと、人間の無力さを感じざるをえない。人間の科学する知恵は、やがて自然の人為に及ばず破壊力を政服することであろう。人心も濁悪よりすくうものは宗教による以外に道はない。念仏がありがたくうけとられる。

▽新潟地震による災害地へは、とりあえず浄土宗々務所より車で現地慰問をしたが、悪道路を往復しての見舞は大変だったらしい。寺院のうけた災害は案ずるほどでなかったが、

檀信徒が大部被害を蒙っているとのこと。

一日も早く復興されんことを祈るや切なるものがある。ついても現在、檀信徒と宗門との結びつきは再考の余地がある。末端の寺院が檀信徒をかかえて非常事態にあえいでいるとき、宗門は力を結集して救援する機能を発揮しているであろうか。

▽宗門は、出家と在家に一応区別されるが、(厳密には現在出家教団は存在しないが)現代は、出家者即ち仲間だけを対称とした宗門づくりでは力は弱い。むしろ、在家即ち一般民衆との強力な結びつきこそ、宗門の近代的組織づくりには要求されるものである。

▽宗門は合同実現したものの近代化を叫ばれながらも遅々として進まない。ちかく変則的な宗会は解散され、いよいよ軌道にのることであろうが、その議員も、いぜん顔パスが有力らしい。もっと末端寺院の意志の反映した選出方法でなされるべきであり、いま求められるのは、ビジョンをもった実践家の出馬であろう。この辺で思い切って若手の起用も一考である。

最近における岸覺勇師の論文の公刊は、魔のついたようなはげしさがある。「略説浄土宗義史」「浄土宗義と光明主義」「善導教学の研究」などがそれである。更に「記主鑽仰」というプリント印刷物が、五月現在三十三号にも及んでいる。こうした精力的発表は、一朝一夕にできるものではない。師の永年に亘る努力の蓄積が、今花を開いたのだと言つてよいであらう。

本書は、従来発表された論文の集録である。

- 第一章 經典に顕われた称名思想
- 第二章 浄土教に於ける阿弥陀仏
- 第三章 浄土列祖に於ける十念釈
- 第四章 浄土列祖に於ける業事成弁

論

- 第五章 浄土宗に於ける観仏と見仏
 - 第六章 善導大師の浄土教
- いずれも、極めて専門的な浄土教義論であるが、皆夫々に重要な問題である。著者自身の自序を借りて、その内容の概略としたい。
- 第一章は、縮刷大藏經の全巻にわたって称名思想を探り、称名の原始的意味より、

肉体的及び精神的救済を初め、滅罪、見仏、往生、涅槃、成仏等の利益を探り、且つ称名の起原及び發達の経路を論究したもので、第二章は、三国伝燈祖師の阿弥陀仏觀を、仏身論的に究明した論文であり、第三章は、十念の原語の意味より初め、浄土列祖の十念について、その出世時代に於ける十念に関する諸種の問題点を明らかに

——紹介——

岸 覺 勇 著

「浄土宗義の研究」第一輯

し、第四章は、曇鸞以下問師に至る祖師の業事成弁を論じ、第五章は二祖三代の観仏、見仏、想念の三種の主張を明瞭にし、第六章は善導教学の全貌を紹介した。

以上によって、本書が如何程に浄土教義の重要問題を快刀乱麻を切る如く処理されているかが、うかがえよう。

尚、この本には、これとは打って変わった平

易な論述で、次の三つが附録とされている。

- 一、浄土宗中興の祖「問師さま」に聞く
- 二、創価学会との紙上対面
- 三、浄土宗と創価学会

いずれも対話体で、過去・現在の人々を登上させ、その人々との対話の中に、夫々の問題を究明しようとするものである。岸師の編みだした新しい浄土教義解説法であるが、宗義の本義をしっかりと踏まえた人の論述であるだけに、安心して読める。論文集の後につけるには、少し俗にすぎる嫌いが無いでもないが、現代に要請されているものは、こうしたものであるかも知れない。

特に、後の創価学会に関する二篇の如きは、師の愛宗護法の発露であり、ともするとすでにマンネリズムになりつつある仏教界の人々に、常に警鐘を乱打する師の熱意に感服せざるを得ない。創価学会に関するものは、別刷りにもなっており、手近な解説書としてよい。(浄土宗義の研究—四二〇円、浄土宗と創価学会—一〇〇円)



杉 浦 演 順 僧 正

高 橋 良 和

(中外日報取締役)

浄土宗では渡辺海旭先生が宗務所の執綱(今の浄土宗務総長)であった頃から野上運外僧正それに里見達雄僧正といった人たちが首班であった時は、内外共に安定したものであった。

その当時宗務所の主事に杉浦演順さんというのでっぴり太った好人物がいたことを記憶している人は多いと思うのである。

この人は後に部長になったのであるが、でっぴり太っていて犬でもつれて歩かしたら、上野公園の西郷さんそっくりと思うほどなかなかかっぶくがよく、見事な体格であった。

背もかなりあって、肩巾が広く、一寸した蔵前の関取りぐらいはあった。太っているこの杉浦さんは、体格がそのようであったから、なかなかの汗かきであったらしい。

その上酒の方では酒豪というより愛酒家の方であって、いつでも額に汗をながして、ハンカチをたっぷり水にぬらすほどしめらせて顔をふいているのは気の毒なほどであった。

杉浦さんは前にも述べた、ように主事から部長にすすんだ人であって宗務の生え抜きでなかなか宗政上に通じた人であった。この人好人物に似ず一寸とつきが悪く、その点で損をしていることが多かったので、ややもすると「杉浦さんはこわい人や」などと田舎から東上して、宗務所に書類などを提出しに行った人の口先にのぼったが、根が童心であったから、憎まれ口だけは減らないとみえて、ちよっとドスのきいた声で、田舎の和尚さんたちをふるえあがらせていたのである。

ところが、戦争中に面白いことが起こったのである。

この西郷さんほど太った杉浦さんに招集令状がきたのである。凡そ二十四、五貫はあったこの人に兵隊の呼び出しがきたこと自体が不思議である。

今こそ笑い咄でいえることであるが、このらいらくな杉浦さんも多少ビククリしたことは事実である。

然しこと天皇陛下からの赤紙とあっては、一時間の猶予もないのであるから、二十四貫の威丈夫かなんと「天に代りて不義を撃つ」の軍歌でおくられながら出征した見事さを想像していただきたいのである。

心のなかではヒョットしたら即日帰郷かもしれん、というよろこびやら心配はあったらしいが、そんなことを口に出さうものなら、たちまち憲兵ににらまれるとあって、この杉浦さんも、全く他の若い招集兵と同じように国民服に身をかためて部隊の衛門をくぐったのである。外には万才万才と隣なりの和尚さんや、檀信徒、それに町内の人たち見送りの声をききながら検査官のところ立ってみると、なんとたちまち結論が出て、即日帰郷というハンコを押されたのである。うれしいやら恥しいやら、さっそくすぐさまその足で吾が寺にかえってみれば、なんとさっき送って行った筈の町内の人たちが吾が家にかえってきていないのに、当の本人が寺にかえってきていて、大東亜戦争最中のことと一寸困ったという話を御本人から聞いたことがあった。

それほど御本人は楽天家であり、童心ゆたかな人であつて、つき合えば合うほど親切なそしてやさしい人であつた。然しはじめはほんとうに一度だけぐっと、人を嚙むというおどしがあつたのが全く玉に傷であるが、面白い人であつたこ

とはたしかである。

この人のもう一つの特長はいびきである。

これは実にものすごく泣く子も黙るほどすごいのであつた。普通のいびきは片道であつて、グウグウと吐く息か、吸う息でうなるのであるが、杉浦さんだけは、ガア、グウ、ガア、グウと往復であるからこれは見事である、

もちろん部長になつても宗務所の旅行や出張にはイツも一人だけ別の部屋でそれこそ高いびきであるが、困るのはその当時の寝台車である。

一ばん端に寝ていても、車中にいる全員がそのいびきで眠れないことがあつたのは一度や二度ではないのである。

モシ、モシと車掌が注意しても、また通りすぎると元の通り。この往復いびきは東海道線の寝台車の名物になつたらしいのである。

そんなことをいっては失礼だけれど、杉浦さんと旅館に同宿したraitは翌日、目をこすりながら、うなされて床から出てくる人が多いのを見ると、この人のいびきはこの近世交名録に出てくる人物の圧観であるかもしれない。

逝つた人のいびきの話などを書いたが生きていたら、「こらつ」とあのギョロツとした目でにらまれるかもしれない。それほど人なつこい杉浦演順さんである。

東南アジア旅行記(三)

佐藤行信

(大正大学講師)

十一月十七日

今日は印度に向つて出発の日である。朝七時起床。出発準備をし、八時に朝食をとり、九時にホテルを出て空港に向つた。今日も誠によい天気である。暑くても天気のよいのは気持ちよい。十時四十分発の飛行機が一時間程遅れた。その待っている間に、丁度クーデター中の南ベトナムのサイゴンに滞在された全日本仏教会の国際局長、中山理久氏がラングーンに到着され、待合室でわずかな時間であるが、サイゴンの様子等、お聞きした。我々一行は十一時半頃、タイ、インターナショナルのDCでカルカッタに向け飛び立った。カルカッタには午後一時半に到着した。カル

カッタは日本とは、四時間の時差があるから、日本では午後五時半と云う云となる。カルカッタの空港は、ダムダムと云う名の空港である。空港には、マハボテイ・ソサエテイ大菩提会の方々及びサンチニケータの大学で教授をなさっておられる春日井先生(現在すでに日本に帰っておられる)が出迎えて下さった。この空港は正直のところ、今まで降りた空港の中では一番きたないようである。印度は二十日間以上旅行するのであるし、それに印度では持っているドルや、カメラを申請しておかないとカメラは、出国の時、税金をとられてしまう。ドルは申請して両替する手帳を貰わないと、印度ルピーにもかえて貰えないのである。そのためだといふ手続に時間が

かかった。なお印度ルピーで一ルピーは日本円にすると、七十五円六十銭になる。一時間程かかり、やっと税関の仕事も終り、それから、タクシーに分乗してカルカッタで泊るオペロイグランドホテルに向つた。ホテルに行く途中の異臭は、バンコック、ラングーンに比較すると、ずっとよいが、前から話しに聞いていた牛が往来に何頭もノソノソ歩いたり、坐ったりしている。又、靴をはいてる人をさがした方が早いと云った感じで、日本で云えば乞食とみわけのつかぬ人が多勢いるのに驚いた。まずカルカッタでの印象は、なんと人間の多い、それも男の人が多い町だろうと云う事である。空港から市内までは十六キロあるそうだが、二十分程で市内に入った感じである。英領だった頃の名残りの洋風の建物がある中に、土造りの小屋も多く、我々の普通考えている都会とは、だいぶ感覚の違う町である。おせじにも美しい町とは云えない。我々の泊るホテルは、カルカッタの大通り、チョーリングー街にある。まずホテルにつくと、部屋を定めて貰いそれから部屋に案内して貰った。ここも階級制度があるよう

で、一番下位の連中に素足で、我々の荷物を部屋までもって行くポーターである。そして我々を部屋まで案内するボーイは決して荷物を持たない。部屋につくと、ボーイもポーターもチップを貰うまでは絶対に部屋を出ようとしない。そこで同室の鵜飼先生と相談し、持っている金の中で、一番の小銭を一人一人に渡して出て行って貰った。そうしたら、今度はニヤニヤしながら、ルームボーイが現われた。彼氏もチップを出すまでは動かない。日本は勿論のこと、バンコクやラングーンのボーイの方が程度がよい。まったくチップずれした連中の多いことよ、あとで部屋にいらった春日井先生と先生の御長男が部屋をあけるとき荷物等は鍵をかけて行きなさいと注意して下さった。我々一行に参加しているたった御一人の御婦人は、一人部屋で、その上ボーイが来て動かないで気持が悪いと云っておられたが、我々男二人でも、あまり気持がよくないのに、まして御婦人一人ではと御気の毒に思った。印度のホテルのボーイはあまり信用が出来ぬようである。本日は午後六時から、マハボデイ・ソサエティに招待されて

いるが、それまでに、まだ時間があるので風呂に入ったり、荷物の整理をしたりした。風呂に入ったあと喉がかわいたが、水を飲むわけに行かないので、コココーラを一本とりよせて飲んだ。このコココーラのおいしかった事、それにしても、水が自由に飲める日本は、本当にありがたいと思った。五時半頃、皆で車を呼んでマハボデイ・ソサエティに行った。夕方は割合涼しくなって来て、その点では快的である。また町の方は一段と人が多くなったようで、これではまるで、カルカタに人間をみに来たようである。それもほとんど男ばかりだ。もうそろそろ歩道の具合のよい場所にも布のような物をひいて、夜のおやすみの準備をしている人もある。平均して日本は生活程度がなんと高い国かをつくづく思った。マハボデイ・ソサエティの所在地は、ごみごみとした街路も狭く生活程度の低い人々の住んでいる地区らしく、まったく汚い場所にあった。このマハボデイ・ソサエティ(大菩提会)は仏教を印度に復興しようとしたセイロン出身の故アナガリカ・ダルマバーラが一八九一年に設立したものである。

ダルマバーラは、仏教の復興及び書籍・雑誌・パンフレットの刊行と、講演行脚した人である。現在の運営は、事務総長のバリシンハ氏を中心に行われている。本年一九六四年



は、ダルマバーラの生誕百年になるので、記念事業が各種計画されている。その一つとして、カルカタに国際文化会館を記念事業として建てるようである。我々が訪れた時は、

丁度このバリシンハ氏はセイロンに行つて留守中であつた。ソサエティに我々が行つた時は、僧侶も二人ほどいたが、これも皆印度人ではなく、セイロンの人であつた。これは印度全体に云える事であるが、印度にいる仏教僧侶は、セイロン、タイ、ビルマ、ベトナム、カンボジャ等、他国から仏教復興のため来ている僧である。

まずハマボデイソ・サエティでは、最初到我々のため歓迎茶会を開いて下さり、そこでは会長代理等の歓迎の挨拶があつた。そのあと講堂に案内されたが、ガンジーとダルマバ

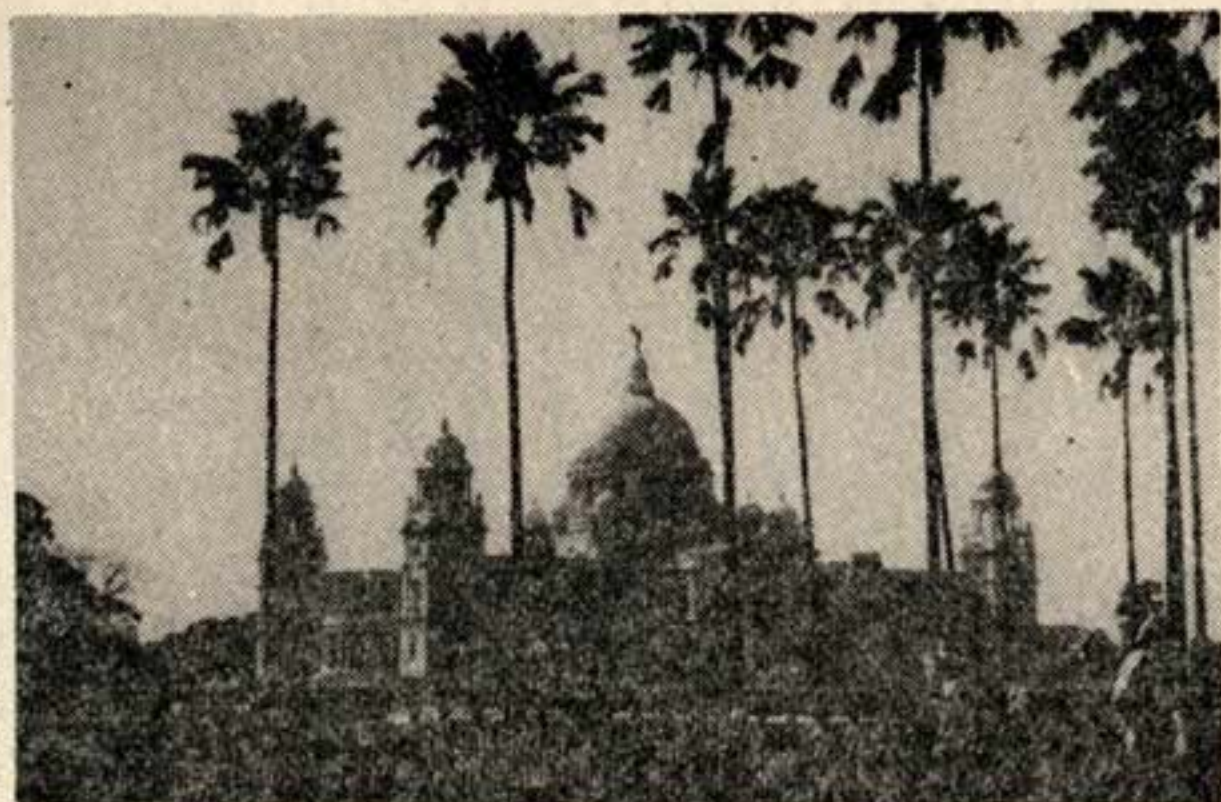
ーラの肖像画がかけられ、仏陀の像を中心に右側に少年少女が並んでいた。少年少女は、小さな蠟燭に一人一人火をともし、線香をささげてから、合唱を行った。なお我々の並んだ後にも男女数十人の仏教徒が並んでいた。

我々も一人一人線香を捧げて礼拝した。その後、団長の木村先生より、我々一行の紹介があり次いで又、ハマボデイソサエティの幹部の歓迎の辞があつた。我々一行の主催団体、国際仏教交流協会よりのおくり物と、団員一人一人から集められた寄附金をダルマバーラ生誕百年祭の記念事業のため差し上げ、あと記念品として、ハマボデイより土造りの仏像とパンフレットを団員一人一人に貰い記念写真を写して歓迎会を終った。その後、ホテル迄タクシーで帰ったが、もう町の歩道には、多くの人が毛布みたいなものをかぶって寝て

いた。ホテルに到着したらすでに九時半になっており、それから夕食となった。相当お腹もすき、食事はおいしく食べた。この食堂と云うより、印度のレストランは、こう云う感じが多い。それは、中央でダンスが出来るようになっていて、正面にバンドが入っており、食事は薄暗くした火のもとでとるようになってゐる。食事がすみ部屋に帰ったらもう十一時、又、明日があるので早々にベツトに入つた。

十二月二十日

七時に起床、八時に朝食をとり、九時にホテルを出て、カルカッタの市内見物に出た。朝からもう大勢の人間が町にあふれている。最初に訪れたのが、ジャイナ教の寺院である。これは、豪華なもので、宝石をはめこんであり、日本では想像も出来ない建築物である。このジャイナ教の教祖、マハーヴィーラは、仏陀とは同時代の人でやはり王族の出身である。教義は、元来無神論で、人間、動物、植物は勿論、地、水、火、風、あらゆる部分に靈魂があると信じられている。なかなか



(ヴィクトリア記念堂)

かこの宗教、堅い信者がいるそうである。この美しい建物をみた帰り道、車のパークしてあるところまで歩いて行く途中、狭い道に、バクシーシーと物貰いが来るのには弱った。

これは、印度旅行中何回も聞いた言葉だ。

次に詩聖タゴールの記念館を訪れた。ここには、タゴールの筆蹟や写真などいろいろな遺品が陳列されていた。ここは、赤レンガの誠に美しい建物であった。次に大通りのケヨリーリングー街を歩いてカルカッタにもこんな美しい公園があるのかと驚くような処に行つた。この緑のこまやかな芝生の大公園、マイダンと云う名であった。コイダンの市にある白亜の大殿堂、ヴィクトリヤ記念堂の前で車を止め写真を写した。次に午前中、最後の訪問地、ラーマクリシュナ・ミツションに行った。ラーマクリシュナ（一八三四—一八八六）と云う人は、ヴェーダーンタ説により、あらゆる宗教を唯一神に到る異った道として、すべての階級に向つて、その説を説き多くの信徒を得て、又その弟子、ヴィヴェーカー・ナンダ（一八六二—一九〇二）は、師の後を継ぎ、ヴェーダーンタの教義を弘めるた

め、ラーマ・クリシュナ・ミツションを設立し、二回に亘つて、英米を旅行し、各地に多くの信者を得、教会を設立したと云う人である。当時は特に印度国内にあっては、英国の王政下に若しむ同朋に精氣と深い宗教的感化を与えた。ここは現在、大学の学生等の寄宿の設備もあり、ユニバーサル・レリジョンとして、各宗教の統一をはかるメジテイションする神秘的なホールもあった。ライブラリー等も良く完備されており、現在は、アメリカの資本が入っていると聞いた。昼食はホテルに帰つてすませ、午後は、最初に博物館に行つた。時間の関係であまりゆっくりはみせて貰えなかったが、丁度、東京でインド美術展をやつておつた関係で、東京に持つて行って陳列してない場所もあった。しかしこう、豊富にあると。あまり有難みがなくなる。それに日本人と違い陳列の仕方がへたである。まして照明等の工夫は全然なかった。しかし一つ一つが、大変な品物ばかりである。次にギタニカル・ガーデーに行つた。ここは、カルカッタ市内より車で一時間ばかりかかったが、園内には、榕樹が約三百メートル四方に

おおっている偉観や、大きなヤシの並木、また池には美事な水蓮が咲き、誠に美しいところであつた。植物園の往復、すごい雑踏した場所を通つたが、ここが今晚汽車に乗るハウラー駅と聞かされ、同乗と竜大の武内先生と、恐ろしい処から乗りますねと話し合つた。午後七時にホテルを出て、ハウラー駅に向つた。駅にその車が到着すると、車に向つておしよせてくる人等が多い。どれがポーターなのか最初は判らぬしまつ、氣持の悪いこと、そのうち、赤い服をきた素足の連中がポーターであると判つた。汽車に乗るまで荷物が無くなるといけなかったので、ポーターの後にガッチリついて行つた。寝台車で四人一組のコンバートメントになっているが、乗ったら鍵をしまておかぬと、ホームの雑踏から誰が乗ってくるか判らぬので危険と云う汽車である。これから明朝六時半まで乗るわけである。荷物を下に入れ、スリーピングバッグをひろげて寝る仕度をした。明日は、四大聖地の一つ、釈尊のお悟りの地ブッガヤを参詣するのであるからすがすがしい氣持でとも思い、早々と寝てしまった。

茶の湯に生きた人びと(6)

紹益と吉野

灰屋 紹益

林 左馬衛

(宮内庁図書寮)

待望の都入りを果たしてから、まだ十日とたたないのに、滝沢馬琴は、自分がもうすっかり京の人になっていくのに、気付かざるを得ない。七夕から七月十三日の盆祭とかけて匂い深くくりひろげられる市中の景物が、おのずとそうさせるのであろうか。宇治から嵐山へ、ほとんど東奔西走というにふさわしい江戸前の日程の中に、いつしか京の雰囲気がなじんできている。

そのあいまを縫うようにして、記憶の底深く湛えられていったものの一つに、京師梅の

宮の祠官橋本経亮の数々の話柄がある。

烏丸光広という方は、牛の背中に腰かけて花街に通われたのである。一体、京の廓は、六条にあった頃が全盛であったもので、板倉重宗がへんな改革を申し渡してから、つまらなくなつたのだ。公家が花街に遊びにゆくときは、必ず夏は下に白のかたびら冬は白無垢を御着用あるべし、なんて、そんな無茶苦茶な話があるものか。八の宮直輔親王は、遊女八千代にふかく契りたまひ、重宗の諫言に従われなかつたため、とうとう二人一緒に配流ということになられた。それでこそ、都人というものである、云々。

大筋は、経亮の話だが、なかに、他の人の話もまじっているかもしれない。だが、とにかく、京都の人の話は京都で聞くに限る。不得要領なようではいつしか人の思考力を奪ってしまふ不思議な力が、経亮にもある。整理すべき馬琴が整理しきれない尻切れトンボの話柄をかかえて経亮を訪れると、そこでなんとなく整理されたような気持になる、そうした毎日が、このところ続いていた。

馬琴は、当初の調査計画予定の一部を、大

巾に変更し、やがて全部捨ててしまつて、ともかく、経亮のいうように、いわば、経亮流の方法で京を楽しむようになっていく。この十日ほどの間に、所期の調査計画があらかた満たされてしまったためもあるが、なんとなく気分本位に過している方が具合がいい。

そうした或日、馬琴は、思わず愕然として我を失うほどにひきつけられた話に出会つた。それは、かの吉野大夫の情夫灰屋紹益が、吉野の死後、その火葬した灰をみんな喰べてしまった、という話だった。

一世紀ほど前の人ではあるが、遊女吉野はあまりに名高く、こと色道に関心を有するほどの者ならば、誰一人としてこれに懐れを抱かぬものとしてない。まばゆい存在である。もちろん、吉野は、馬琴の調査計画予定には入っていたし、いや、むしろ、その面影訪ねて京まで来てみたという方が真に近い、三十七才の馬琴であった。

馬琴は、経亮を懇懇して、灰屋紹益の孫にあたる栄庵という男を訪ねてみることにした。

都をば花なき里となしにけり

吉野を死出の山にうつして

という歌が、人口に膾炙しているという。その灰屋という家が、かつて豪富をもって鳴った商家であったということ、吉野を身請けした重さで、さすがの名家も衰えたのであるということなど、経亮がきかせてくれる京ひとの知識の中には、明らかに、紹益に対する尊敬の気持が秘められているのを、馬琴は感じることができた。

栄庵は、両替町二条下ル所に住む、医者であった。あまりはやらないらしく、いかにもみすばらしい暮しをしているばかりでなく、話に教養らしいものがみられなかった。つきつめてきいてみると、紹益が七十三才のときの妾の子の末であるということだ。父も祖父のように蹴鞠を嗜んだといっていたが、本人は、駄目であるらしい。

馬琴は、吉野太夫所有と伝えられる蟹の絵の盃を丹念に写生しながら、墓のありかや、紹益の家の話を、こまごまと尋ねた。過去の偉大な光栄を裏づけるものが、この盃の他にないもないということを感じたものか、どういうわけで彼が所持しているとも知れない二

代目吉野の文というのを、栄庵は持ち出してきて、みせてくれた。手跡は見事だが、ここには、かの吉野はいない。

「あの蟹盃だけは本物だね。」

そんな話をしながら、経亮と引上げる途次、馬琴は、急にとりともなくなった彼自身に、妙に、淋しいものを感じていった。

享保二年の旅が終るまでに、また、終つてからも、馬琴がえた吉野の話は数多かったけれども、それ以来、馬琴の脳裡に、吉野は灰屋紹益とともに住みつくようになっていた。

紹益が、情婦の骨を食べてしまったという話は、なにしろ家が灰屋だからという駄洒落から生れたものであるとしても、そうした話を捧げられるためには、紹益が図抜けて偉大な遊蕩の人であったことを前提にしなければなるまい。人生の果に遊びがあり、遊びの果に女があり、女の果に吉野が位したとするならば、その吉野を得たというだけでも、紹益が最高の男だったとするに十分であろう、やはり窮極に、その話にあらわれたほどの純が秘めていなければ、そうなりえなかった。

であろう——と、馬琴は思わないわけにはいかなかった。

成瀬正胤という画かきが話してくれた話によると、紹益は、吉野をうけ出した時、父から勘当を申し渡されたのであった。ある日、その父が、下京に所用で赴いた時、息子と吉野のすみ家とも知らず、雨宿りに立寄った家で、美しい町女房の接待を得た。主人は留守であったが、炉に釜がかけてあり、その風情から茶の点前まで、このあたりにふさわしくぬめてたさであった。淡茶を御馳走になったのだが、あまりふしぎなので、次の日、人に話をする、それがつまり、息子の家であった。このことがあって、紹益は、勘当を許されたのであるという。

京の人々の話によつてみても、灰屋紹益が名高い茶人であることは一致していた。また和歌をよくし、松永貞徳と親しかったばかりでなく、栄庵の話にあったように、蹴鞠に堪能なスポーツマンでもあったのであって、その縁で、尾州紀州の両公にしばしば召されたのであるという。京都の人々の語調の中には、茶人というものは、これらの諸芸をふく

めての茶人であるのだ、それでこそ大茶人なのだという、匂いが漂っていた。

そうか——。馬琴は、これまでに感じたことがなかったほど大きな茶の世界が知識の彼方にあったことを、あらためて感ずることができた。でも、柴庵のあの貧窮ぶりはどうであるのか、灰屋というのがそんなに豪勢な家であったのか、という点に疑問が残ったので、更に尋ねてみると、ある人は、こう説明した。「下京に息子がいるというのに、訪ねてまだ気がつかなかったなんて、よほどの金持でなければ、考えられないことじゃありませんか。」

かれこれ話を合わせてみると、灰屋が堂々たる大金持であったことは動かないようであった。実際、そういうえば、牛に乗って京の町中を徘徊したという烏丸光広卿も、吉野の墓のほとりに住んだ光悦老人も、鶯色裏の羽織というのを花街に流行させた小堀遠州公も、そうした広い世界の豊かな茶人たちであったわけだ。——馬琴は、もともとあこがれていた近世初頭の歴史への傾倒感を、ひとしおふかめえたような気がした。

ただ——、紹益という人の場合、これだけ真剣に人々から語りつたえられたのは、ただごとであるとは思えない。そら、馬琴は、思わざるを得なかった。そこには、たんなる金持が讃えられたのとは違う、なにものかがある。それがなんであったかということ、馬琴は、奥ゆかしく思った。

紹益の茶が、いくらすぐれたものであったとしても、それは、観念の上でだけすぐれたものとして伝えられた。たんなる茶であったにすぎまい。そして、彼が、茶の世界にあってかけがえない人として記憶された理由は、大金持であったことにあるのでもなければ、蹴鞠や文学にあったのでもあるまい。端的に、吉野を身請けしおおせた心意気に、人々の共感がよせられたのであるとするのが、やはり、うがったみかたになるようである。

紹益が、灰屋一代の財を投げうって吉野を購ったこと、それは、必然的に、吉野を食べってしまったひたむきさにむすびつく、非凡な人となりの意味するものでなければならぬ。人々は、紹益のその人となりを通じて、真に尊敬含味するにふさわしい人物の、純愛の物

語を創造しえたのであるに違いない。

馬琴にとっては、人々が模索の果てにつくり育て上げた紹益に関する説話の方が、紹益自身がものしえた唯一の著作「にぎはひ草」二巻を読破した感動にもまして尊いものと思われた。

紹益と吉野に関する聞書は、馬琴の道中記の中に細大洩れなくノットされた。

出版社の求めるままに、道中記をまとめ、雄笠雨談と題して刊行した時、この旅の大きな収穫であったこの話は、当然のことながら、生彩ある記事となって書中を飾った。

もっとも、重要でかけがえないものを公刊したがない馬琴の習癖は、この際も働くところがあつたものであろうか。書中には、吉野に関する調査に関係したことだけが、他所行きにまとめられたにすぎなかった。吉野の骨を灰にして全部喰べてしまった紹益のここまごました話のどれをたれから聞き伝えたかという詳細な注記などは、馬琴が死後もなおその刊行を禁じていた一連の著作の中、「壬戌羈旅漫録」と称する冊子にだけ、ひそかに書きとめられたのであった。

六呂見のお盆

——記 主 念 仏——

伊 藤 唯 真

(滋賀・淨西寺)

ここ数年前から仏教大学で、民間念仏信仰の総合研究が行われています。ここで云います民間とは、村落や講などの社会的共同体のことでありまして、この共同体に本山や宗派の監督を受けないで受け継がれてきました極めて伝承性の強い念仏儀礼を通して、念仏信仰の形態、社会への定着の仕方などを考え、わが国の伝統的な宗教的生活様式をさぐろうとする研究であります。

従いましてこの研究は実態調査から出発せざるを得ないのでありまして、私も各地の調査に参加したのであります。調査をしておりますと、世相の変遷とともに、伝統的慣習の担い手がだんだん少なくなっていき、念仏儀礼もあるものは消滅し、あるものは変化しつ

つあることがよくわかり、この種の調査研究は一日も早い方がよいと痛感させられたことがよくありました。しかしその反面ありがたいことに、熱烈な信仰心をもった伝承者がおられるお蔭で、古くからの伝統が今に続いている場合も多く、宗教に裏づけられた伝統の強さというものに感銘したことも度々であったのであります。

ところで民間で慣習化された念仏、つまり民俗化された念仏を調査しておりますと、民間念仏がさまざまな様相と機能を持っているのに気がつきます。大念仏、六斎念仏、百万遍念仏、踊躍念仏、双盤念仏、虫送り念仏など名称、実修の上で多岐にわたり、機能の面におきましても死者供養的念仏、農耕儀礼

的念仏、民俗芸能的念仏などと多種に及んでおります。それだけにこれらの中には、宗義から離れ教旨に沿わぬ要素を多分に附着したのも少なくないように見受けられます。

しかし、行きずりの施行者の観察の態度を棄て、住人の立場に立って理解の態度をとるとき、念仏儀礼の慣習性民俗性の上に念仏信仰の純粋性がダブっていることに気がつくのであります。一見風俗としての念仏儀礼の中に、宗教としての念仏信仰が宿っているのを見出したとき、念仏は活きている、とうれしく感ぜられるのであります。

これからご紹介しようと思います六呂見の記主念仏も、以上のような意味で感銘いたしましたものの一つであります。

名古屋から国鉄関西線で伊勢に向いますと一時間たらずで三重県最大の都市四日市に着きます。波静かな伊勢湾に面したこの地は、最近昭和石油を中心とする一大石油コンビナートを招致しまして、今や北勢工業地帯の中心となっています。駅から車を拾って南へ向いますと、しばらく活況を呈した街なかを走りますが、間もなく田園風景が現われ、六呂

見の町が見えてきます。

この六呂見に記主念仏が伝承され、記主禪師来錫の名刹観音寺があります。観音寺には記主禪師自作の肖像木像が秘蔵されています。この木像は鎌倉期のもものといわれ、浄土宗宝に指定されています。記主禪師とは云うまでもなく浄土宗三祖の然阿良忠さまのことです。

記主念仏は記主禪師伝来の声明念仏と称されています。毎年八月十三日から十五日までの三日間だけ、いずれも夜間に唱えることになっています。記主念仏を唱える者は初盆精霊を出した家の遺族に限られ、男子一名ずつが参加します。男子のいない遺族では近親者の男子が替って参加します。このように遺族が実施するので、特定の講もなく、員数も一定しませんが、六呂見という地域共同体の念仏といえましょう。

念仏の実施者は全員カミシモを着用し、錫杖と称する竹製の杖と小さな鉦鉦を持ちます。先達と称する念仏のリーダーは菅笠をかぶります。

さて、観音寺ではこの日にそなえて、本堂

の本尊前須弥壇上に、記主禪師木像を開扉して安置します。夕方六時半頃になると念仏の連中一同打揃って、まず本堂向拝の前でお木像に向って一流れ念仏を唱えます。念仏はナムアミダブツの繰り返しが約二十五分ほど続き、最後に願以比功德の文を誦します。途中適時手にした小鉦鉦をならします。節まわしは単調ですが、終りに近ずきますと次第に高く、速くなります。

次に本堂前左右の石塔に向って短い念仏を唱え、終って直ちに本堂裏墓地内の無縁墓に赴き、ここで当年の初精霊のために心をこめて念仏一流れをつとめます。

念仏の一行が墓地から本堂前に帰ると吊り鐘がならされ、浴衣姿の子供達が大人に手をひかれ、きれいな灯籠をさげて竜宮門型の山門をくぐって来て、各自の墓前へ灯籠を捧げます。夏の宵の風物詩として心たのしくなる一時です。

この間一行は自宅で少憩をとっています。十時前町の地藏堂に集まり一流れ念仏してから、列を組み六字誦を唱えつつ観音寺に向います。そして向拝前でもう一流れ唱和し

ます。

毎夜同じことが繰り返されますが、十四日には盆踊りがあります。また十五日には最後の念仏と共に禪師像が開扉され、翌年の盆まであけられません。

記主念仏はこの木像開扉の期間中に唱えるべきもので、「記主さまの出ておられる間に申さないとダメだ」と人々は云っています。住職の岸覚勇師は「記主念仏の声が聞えるとお盆がきたという感じがし、初精霊はこの念仏に迎えられ、これに送られて浄土に帰られる」という感じだと仰っています。

一体に、六呂見の附近は盆の念仏が盛んで、富田一色の大念仏、日野の大念仏などがあり、いずれも記主念仏と同じ時期に行われ



(伝師自作記主禪師像)

ます。大念仏は死者供養の念仏です。記主念仏が大念仏と同じような機能を持っていますことは右のような説明でおわかりのことと思います。記主念仏は記主禪師の靈に対する追善供養の念仏であつた、と私は思います。恩徳報謝の念の強い土地柄でありますから、禪師と関係のある土地の中でも六呂見だけが、「記主念仏」を残し得たのであると思います。元祿時代にできました、「蓮門精舎旧詞」に、記主禪師が此地で勸化の時、在家に阿弥号を授けられ、今に観阿弥、専阿弥等の末裔が居る、と書いてありますが、観阿弥は現八鳥家の祖であり、専阿弥は現清水家の祖で、



(墓地での記主念仏)

日永に両聖寺を開いたということです。此処はこのように記主禪師の教化を強く受けている所です。大念仏などと云わないで、記主念仏と称して追善供養の念仏を継承してきましたこと自体に大きな意義があると云わざるを得ません。

記主念仏は、確かに在家衆を主体とした民俗念仏です。しかし御住職の御教化もあつてそれ以上のものがあります。すなわち六呂見の人々は盆の記主念仏を通して禪師の恩徳を謝し、ますます讃仰のまことをいたすとともに、新亡者の面影を偲びあわせて自己の念仏策励のよき機縁とされているのであります。

福の種を蒔く

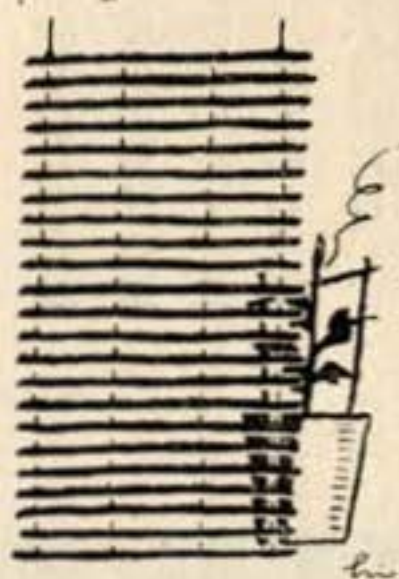
昔、インドに貧しい画家がいました。彼は妻を郷里に残し、修行のために旅に出ました。三年の間、大いに勉強をし、旅の先々で絵を売って暮し、ついに、三百金の蓄えが出来たので、故郷に帰るこ

とになりました。その途中で衆僧供養の大法会が行われているのを見かけて、思いました。「私はまだ福の種を蒔いたことがない。いまこそ福の種を蒔く田地に

出逢つたのだ」と、彼は惜しげもなく、蓄えた三百金を投げ出して、供養し家に帰りました。空手で帰つた夫を見た妻は大いに腹をたてました。彼は仕方なく「財物はすべて尊い教団という堅固な蔵に貯えてきた」と、いい

の種を蒔くことを知らなかった。しかし福の種を蒔く田地に出逢つて信仰心がおき、やぶさかな心をすて、施したのである。なぜならまことの富は財物の多少によるのではなくて、心の中にあることを知ったからです」と、答えたので、官はその心をたたえました。間もなく画家の名声が大いにあがり、そのため画家は大きな富を得ることが出来、夫婦は幸福に暮すことが出来ました。

続 三部経の再発見(3)



須藤隆仙

(函館称名寺執事)

浄土經典はインド成立

さて問題の三部経はインド以外の土地で成立したものであるという説であります。

これも学者によって様々の説がありますが、やはりインドで成立したもの、ととっていくのが正しいようであります。

矢吹博士はアミダ仏に關係ある經典の訳者四十九人について統計表を作り、中印度十三人、南印度三人、西印度一人、北印度十二人、西域二十人とし、アミダ信仰の成立は西北インドであらういっております。

渡辺博士は内容からいっても浄土經典はインドでの成立ではないというのですが、宇井伯寿博士は『經典の成立とその伝統』という著書の中でミダ信仰を「決して異教の方面から入込んだ思想又は其影響によって發達したものと見るべきでない」といい、「極樂世界の華麗、端正な光景は古く既に阿含經の或ものにも似たものが見出されるがこれが抑々インド人の考える理想郷の一種の型で、インドの地勢、国勢、国情など複雑な要素から描出されたもの」といって、むしろ内容からいって、インドで成立したもの、としているのであります。

とくに竜樹の十住毘婆娑論や、世親の往生論までインド真撰のものではないであらう。とする渡辺説は、もはや学者の

論というよりは、浄土教を毀損しようとする悪意が見えて、このような学者が何人でも仏教はなに一つ裨益ひえきされないことを残念に思うのです。毘沙婆論や往生論については、弟子たちが毘婆論などを書いたと証明したものがないから偽作であらう、という話にならない愚かな推量なのであります。この論法でいくと一々弟子の証明がないと著述の事実が認められないというまことに奇妙なことになるのであります。周知の通り毘婆論は竜樹の作として鳩摩羅什がこれを訳しており、往生論は世親の作として菩提流支が訳しております。多くの学者がこれを認めており、渡辺説のような妄想でこれをかたづけようとしても、甚だ無理であります。

法蔵因位は仏教の常道

渡辺氏はまた、法蔵比丘修行のことが、大経以外の他の經に見えないから、聖土門的なアミダ仏、すなわち本地大日の分身としてのアミダ仏、は認めるが、法蔵菩薩の話になる浄土門のミダは認めない、というのであります。渡辺氏は真言宗の方で、前の『日本の仏教』を書いたときも、必要以上に真言を弁解し、浄土門をさんさんこきおろしたのであります。あるいはこの方は、浄土教に何か怨みをもっている人かも知れません。

それはともかく、大日の分身のミダなら認めるが、法蔵因位のミダは認めないと、ということになると、渡辺氏の仏教学が忽ち外道の曲学となるのであります。

何故かというに、仏教の仏は、必ず凡夫から仏になるという、いわゆる成道の形をとるもので、法蔵因位を認めないということになれば、それこそ仏教としては新奇な説となり、外道の神となってしまうのであります。

法蔵菩薩のことは、私がさきの『再発見』で述べたように、本仏の開顯であります。それが成道という仏教の建てまゑに現成されて、法蔵菩薩の仏説として大経にのこされたわけですが、それは大経が初めから、アミダ仏の真身を開き顯わすべく説かれたから、もっぱらそこに法蔵菩薩の因位が示されたわけで、そのためにこそこの經が、この經としての特色を有しているのであります。それを渡辺氏は、大経に説くようなことを他の經にも説いてくれ、それでなければ大経は認めぬとこういふのであります。それぞれの經典が、それぞれの特色をもつものであることを渡辺氏は知らないのであります。あたかも小学校で大学の授業もやってくれ、そうでなければ大学の存在を認めないぞ、といつてごろついているようなもので、滑稽であります。

ミダ信仰はインドからきた

渡辺氏はまた、「紀元二世紀ごろから中国に仏教が輸入されたとき、人々は漠然と西方に仏陀の国を想像したそれを天竺とも天寿とも呼んだ。いずれもシンドないしインドの訛りである。それは仏陀の国であるが故に死後の救済の国でもあった。また仏典の中には東西南北等にそれぞれ異なる仏陀のいますことを教えてあり、西方は無量光、無量寿などとよばれる仏陀が主宰することを知った。そこで西方と仏とが二重のうつしになってアミダ仏の西方極楽浄土を信仰する新しい宗教が東アジアで成立したのである」と結論しております。

ここまでくると、渡辺氏の「ものの考え方」が、まことに混線していることがいつそうわかり、文学博士とはこのようなものかと実は驚くのであります。

この結論によると、西方極楽浄土の信仰はインドを仏陀の国と尊んで起った、ということになるのであります。それならばそこからできあがったと渡辺氏が力説する浄土の經典は、もっぱらインドを思慕した浄土が説かれていなければならぬはずであります。ところが実際はどうでしょうか。大經は靈鷲山で、觀經は王舎城で、小經は祇園精舍で、ともにインド国内でこれが説かれたとなっており、さらには、西方十萬億の仏土を過ぎた浄土（小經）とはいうものの、ここを

去ること遠からず（觀經）ともあり、世親は「三界の道に勝過せり」と釈すなど（往生論）、渡辺氏がいうような東南アジアからインドを思慕した浄土などというものは、その片鱗さえうかがえないのであります。いったい浄土のどの經典に東アジアからインドを信仰した様相が説かれているでしょうか。まことに驚いた独断であります。

また西方インドは仏陀釈尊の国で、そこに西方ミダを説く經典が現われて、両者重って西方極楽浄土ができたというのですが、そのつぎに渡辺氏は、自分がこの一文を書き出したのは「アミダ仏と西方極楽浄土との信仰は本来の仏教にはなかったことを論ずる」ためであるとはっきり結語しているのであります。するとさきの結論といまの結語と甚だ矛盾するのです。さきにはインドを思慕するところに、西方ミダの仏典が重って浄土信仰ができたといっているのに、こんどは西方ミダ説が仏説でないことを明すのが目的であるところいうのです。それだったなら「西方ミダの仏典が重った」という、その重った仏典も仏説でないと否定されるわけですから、渡辺博士の『アミダ信仰はどこで作られたか』という著作は根こそぎ、ひっくり返ってしまうのであります。「AにBが重ってCができた。ためにBはもともとなかったのである」と、ざっとこんな論順であって、全くそれは問題になら

ぬほど混線したもので、結論を出すために条件を並べ、逆にこんどは結論で条件を打ち消したのですから元も子もなくなり、この博士さんはまことに頭腦のおかしなお方でありま

学論の正しさ

こんな話があります。二世紀半ばかり前、フライブルグの鉦山学校に、ベリンガーという地質学の教授がおり、付近の化石を採集して、ノアの大洪水のときおぼれた生物の遺骸であると主張しておりました。ところがいたずらな学生が、それを裏づけるような素焼きの形象を作って埋めておいたため、教授はますます自説を喜び、一冊の本にして洪水学説を宣伝しました。ところがその後、発掘品中のなかからベリンガーの姓名を刻んだものが出たため、この教授はたいへんな笑いのものにされてしまいました。

ちょうどこの話と同じようなのが渡辺学説です。ベリンガーの方は、悪い学生にいたずらされたのですが、渡辺氏の場合、自分自身でいたずらな者にも、また笑いのもののバカ博士にもなって、二役を演じているのであります。

すなわち、東アジアに西方無量光、無量寿という仏を説いた仏典が入って、そのために浄土信仰ができたのであるか

ら、西方無量光を説いた仏典は東アジアでできたものである。という、話にもなにもならない奇論であって、自説を妥当化するため学生が作った形象をもち出したベリンガー教授と同じに、ミダ信仰は仏説でないと主張しようとして、その証拠にミダ仏説をもち出したのですから、まことに笑止千万であります。

天竺と天寿国

それにまた「天竺」と「天寿国」との考証も甚だ杜撰であります。「西方天寿国」というのを、果して直ちに「西方インド国」とみてよいか、渡辺氏は西方天寿イコール西方インドというのですが、随千仏山靈巖寺磨崖造阿弥陀仏象記に「敬造阿弥陀像一軀、願共一切衆生同登攸（六字不明）保天寿」とあるので、天寿国はミダ浄土であるとする説もあり、有名な天寿国曼荼羅については法王帝説に「天寿国とはなお天というがごときのみ」とあり、これを直にインドとするのは早計です（この外これを靈山浄土とか都率天とする説もある）。このように『天寿国』が論の素材そのものとしても甚だおそまつである限り博士がいくらミダ信仰は東アジアで作られたと力説してみても、ハイハイと首肯できないであります。

——こ法語をいただく——

わが心のわろければ往生はかなはじと申あひたるが、やがて本願をうたがふにて侍るなり。

（往生大要抄）

けん命にお念仏を唱えている時でさえも、フト気がつくといつか頭の中では別のことを考えているのを知って、これではならぬと自分が嘆かわしくなります。また日々の暮しにはよく不平不満を感じ、これは環境が悪いのだと他人のせいにして怒りを憶えますが、よく考えてみれば自分の貪る心が原因となっていて、いることが多いのです。このように貪りと怒りのために罪業を重ねてゆく自分が、我ながら恐ろしくもあり意気地なさが嘆かれます。

阿弥陀さまのお慈悲がいに広大無辺であろうとも、自分のような悪業深いものにまで本願力が及ぶものでないかも知れません。阿弥陀さまは十声一声のお念仏によって往生させるといわれるが、並大抵の人に当てはまることでないように思われます。妄念をおこさず、罪をつくらず、深い悟りを開いた人であ

ってこそお念仏による往生ができるのだと考えるようになります。

しかし善導大師は凡夫がそのまま往生できる信仰をお説きになりました。即ち貪りや怒りや愚かさをどうしても断ち得ない人々、そして罪惡を作らずにはいられない人々のためお念仏を説かれました。阿弥陀さまの本願を素直に深く信ずるならば、たとえ十声一声のお念仏でも必ず往生できると説かれました。

法然上人は、このようにお話を進められてから更にこう申されました。

「心の悪いものは往生できない等といい合うことは、それは即ち阿弥陀さまの本願を信じないということである」

「やがて」ということは、直ちにそのままという意味であります。

善導大師は凡夫が往生できる信仰を説き明しました。それを信ずるかどうかは各人の信仰の問題であります。

阿弥陀さまのお慈悲は人のはからいによる善惡を問題にいたしません。もしある仏さまが人間は煩惱を持ってはならぬと申されたとしたなら、人間のなし得ないことをお命じに

なったことになります。また善人だけを救い悪人を見捨てる仏さまがあるとすれば、その仏さまは裁判官のような方であると申してよいと思います。同じことを人間の側からみれば、善業を積んだから我こそ往生できると己惚れたり、愚か者は往生できないと他人を軽ぶしたりすることになります。

何が善であり、何が悪であるかというと実際には議論が百出して難しいことになります。同じ一つ事に対しても一方では善であるといい、他方では悪であると主張する今の世相にあつては、善惡の規準さえ明かではありません。しかし信仰の世界では貪りと怒りと愚かさから生ずるものが悪であります。仏さまは人間の善惡の多少や罪の輕重を問題にされませんが、仏さまのお心を察して少しでも惡から遠ざかるように努めなければなりません。要は仏さまのお慈悲を深く信ずることです。あります。「往生は不定とおもへば、やがて（即ち）不定なり。一定とおもへば、やがて（即ち）一定する事なり」の御法語の通りであります。

編集後記

○大正大学の浄宗会が、最近活発な運動をし始めた。再出発の一つとして、講堂で御忌会をやったが、理事学生は全員改良服で、導師の佐藤良智博士も威儀を正しての導師であつた。久々に浄土宗の勤行が、大正大学をゆるがした。

○真野正順博士の遺稿「仏教における宗派意識の形態」の出版の企画が進んでいる。今年末の三回忌には是非完成させたいと發起人の人々は馬力をかけている。

○此の度の新潟地方大地震に対して法然上人讃仰会・浄土編集部一同心より御見舞申し上げます。

○新潟地震は、全く恐ろしい限りであつたが、宗門でも早速、立ちあがつて援助の手をさしのべたようであるが、やはり大正大浄宗会でも、伝導旗をかかげて、池袋・渋谷で声をからして募金していた。八万円集まり、朝日新聞に寄託していたが、額はともかくとして、こうした動きが宗門学生に出てきたことは得難いものであつた。

○新潟地震の話題をもう一つ。十六日午後一時地震と同時に発生した昭和石油の貯蔵タンク火災は、月も替つた七月一日午前五時にやつと鎮火した。これは実に八十四基のタンクを焼き、延々三百五十二時間燃え続けた。この火災によつて近くの民家・会社二百八十六棟が類焼した。タンク建設の際、附近の人々の心配に對して、「火災は絶対大丈夫」とのタンクほどの太鼓判をおしたそうだが、又保険会社も地震の際は、「規定」により保険料金の支払はしないとのこと。なにか

割りきれない。

○浄土の読者が、次第に増えてきたことは嬉しい限りである。特に投稿頂いたのを仏縁として読者になつて頂く方が多いのは、此の上なくよいことである。もつともつと、その意味で投稿者を開拓して行きたい。

○オリンピックまであとわずか。云いくたび、聞きづかれした事ながら、日本のために是非是非成功させたいもの。加うるに多数のメダルを獲得すれば尚結構。

○東海道新幹線も今秋開通の予定。京都に宗務庁を持つ東日本の要人方々にとつて「現実の超特急」は正に福音。開通式当日（十月一日予定）は義宮殿下の御婚儀に相当するため、宮様方・閣僚方の開通一番テーブルを依頼出来ぬとあつて国鉄側頭を悩ませているとか。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 八月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十九年七月廿五日 印刷

昭和三十九年八月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

郵便東京八二一八七番

大阪市大教授 諸戸素純著 《浄土シリーズ》Ⅰ
文学博士

法然上人の現代的理解

B 6判百四十頁
定価二百円
送料三十円

本書は著者の深い宗教学の造詣から、法然上人の思想と信仰とに、現代的なスポットをあてたものである。本書によつて、上人の宗教の真髓があざやかに描き出され、現代人の信仰のかてとして、新しい光を放っている。

京都市東山区林下町

発行所 知恩院宗学研究所

電話京都五六―五六四一

日本一の生産・設備

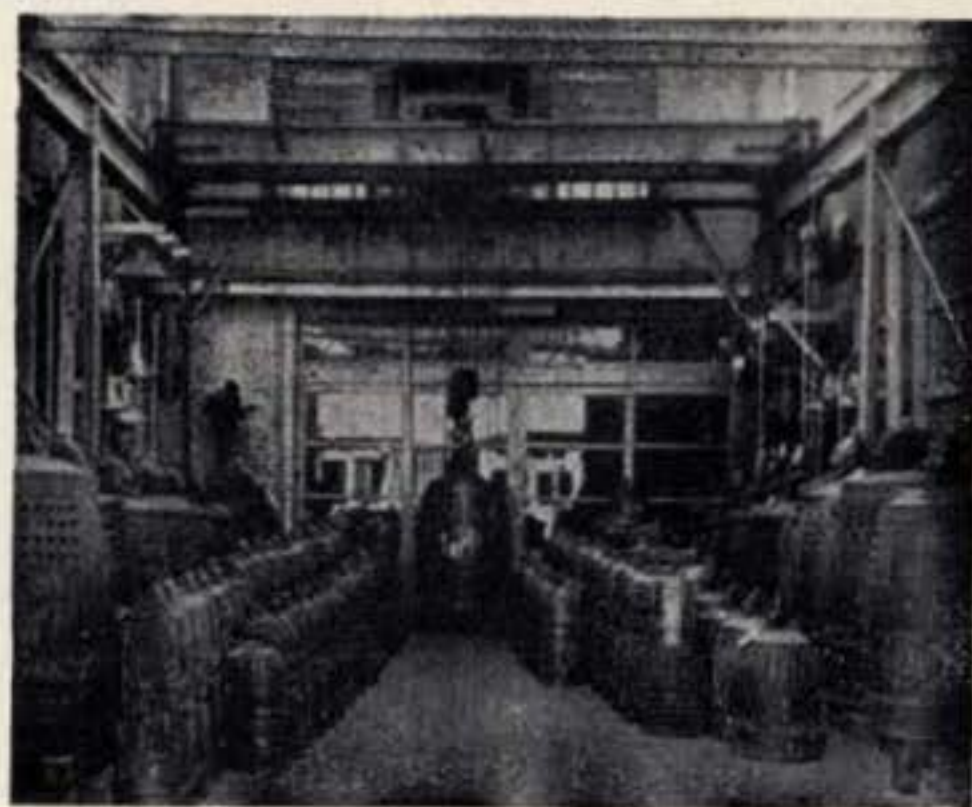
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響 理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
藝術院賞受賞



詩物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 340 8847番 本社工場 高岡市横田